



わが愛と命の記録

石坂洋次郎

講談社

わが愛と命の記録

◎ 石坂洋次郎 一九六〇

昭和三十五年五月十日 第一刷発行

三六〇円

著者 石坂洋次郎

発行者 野間省一

印刷所 株式会社 文弘社

発行所 株式会社 講談社

振替 東京 三九三〇
電話大塚(四二) 大代表三二二一

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

(製本 大進堂)

目 次

亡き人の山河
松葉杖の少年
別れの馬車
父と子の家
孤児の道
老いた前科者
銀座の人
最後の絵
孤独の夜
渡る世間

97 87 77 67 57 47 37 27 17 7

さいはての街	107
さがす人々	118
この運命的なもの	128
不安の時代に	137
旅人たち	147
暴力	157
第二の結婚	167
妻の座	177
もう一人の子を	187
飛驒の人	197

末	た	第	焦	こ
	だ	四	土	の
尾	一	の	と	夫
に	人	男	死	婦

装幀
佐野
繁次
郎

245	237	227	217	207
-----	-----	-----	-----	-----

人的な勉強に努力した記録のあとを、私は涙なしには読めませんでした。十七歳のジョニー少年から、四十九歳になる私が、死を前にした生き方を教えてもらつてゐるような氣持でした。

もちろん、年齢や国籍の相違もあり、ジョニー少年の感じ方・暮し方に、私が何もかも共鳴したというわけではありません。彼は死を迎えるのに積極的な態度をとり、自分に約束された短かい生存の月日の間に、出来るだけ多くの物事を学び知ろうとしております。たいへん難かしいものだというアインシュタインの相対性理論などにも知識欲をもやしております。(彼の場合は、知ることすなわち生きることであり、単に知識欲とよぶのは当らないかも知れません)

その点、人生の敗残者といつてもいい立場に置かれてゐる私は、死を迎えるにも受動的な諦観の氣持が強く、またもし、自分に物を学ぼうとする氣力が残つてゐるとすれば、宇宙や人生の客観的な真理ではなく、社会主義とは何か、共產主義とは何か、それらが実現された社会では、私共の生活する心理がどのように変わるものか？

男女の關係は？ 親子は？ 夫婦は？ —— そんな事を

究めつくしてみたいと思うのです。

というのは、貧しい日本の国の中流社会の一主婦として、もつとも長い精力的な時期を過ぎてきた私は、そういう自分の過去に、若干の愛着と共に、それに劣らない程度の悔恨のようなものを感じてゐるからです。女として人間として、もう少しましな生活が出来なかつたものだろうか。そういう漠然とした、しかし根の強い不満が、ときおり私の胸の中に目覚める事があるからです。

それに関連したことになりますが、私は「死に驕るなかれ」の中で、ジョニー少年の死に対する闘いでなく、まつたく別な事で、ひどく心を打たれた箇所があるので。それはこの記録をまとめたジョニー少年の父、ジョン・ガンサーは、ジョニーのお母さんとは事情あつて離婚しており、ジョニー少年が脳腫瘍を患つてから、お母さんは遠くからかけつけ、二人は父親として母親として(しかし彼等は夫婦ではない)、協力してジョニー少年の闘病生活を助けてゐるのです。そして、ジョニー少年は、自分の日誌の中に、そういう両親のことを「僕の父も母もまつたく素晴らしい人々だ」と、飾り気なく賞讃しております。

私はそこを読んで、日本の母親の一人として、ドキリとする強い驚愕に打たれたのです。貴方がたも考えてもらいなさい。日本の社会には、離婚している両親のことを、子供の立場から「どちらも素晴らしい人々だ」と素直に云えるような心理は、まだ存在していないのです。双方に離婚の十分な理由（一方が一方を傷つけたのではなく、まったく性格的に相容れないといった場合のような）があつたとしても、それが子供達に及ぼす影響は、暗くジメ／＼したものであり、あげくの果ては、子供達がひねくれたり自暴自棄に陥つたりするばかり。逆立ちしても、日本の子供達の口からは、離婚した両親がそれ／＼に素晴らしいなど賞めたたえる言葉は出て来ないでしょう。私共の生活の心理には、まだそれだけの余裕がないのです。（その余裕は、社会の制度や経済的な問題に制約されているのだと思いますが……）

余裕がないばかりか、ここではまだ、親子とか夫婦とかいうと、その結びつきの底にジメ／＼した粘つこいものがわだかまつており、明るい理性の光が、そこまでは届いていないような気がするのです。そして、そういう非理性的な立ち遅れは、社会の全体にわたつて存在する

のではないでしようか。明治の末期ごろ、日本の社会に、女として生れたが故に、特に私はそういう事を痛切に感じさせられるのかも知れません……。

「僕の父も母もまったく素晴らしい人々だ」というジョニ少年の言葉は、父として母として両親をみると同時に、彼等をそれ／＼独立した一個人の人格者として眺めることが出来る者の口からでなければ吐き出しようもない言葉です。私は、これ一つだけからも、欧米の一流国の人々は、私共よりもはるかに豊かな心理をもつて生活していることを認めないわけにはいきません。

さあ、私はとんでもない横道に外れてしまいました。

私がお前達に当てた、この手紙よりの文章を書く気になつたのは、気まぐれなお喋りをするためでなく、実にお前達にある報告をするためだつたのです。それは、私が、一、二年前から、身体の工合がいい暇々に、自分の自叙伝めいたものを書き綴つているということですから。そして、それはもう私の予定している三分の二ぐらいの所まで進んでおります。書く速度はだん／＼鈍つて来ておりますが（私の体力や気力がそれだけ衰えて来てるからです）、なんとか予定どおり完結するまで生きのびたいものだと願

亡き人の山河

一

大正十一年晩秋——。

山陽本線^{わが}和気駅で、下関行きの列車から、六歳ばかりの少女を背負った男が、降りた。

一瞥して、思索^{しえ}生活^{せいかう}をしている人物と判った。

長髪で、彫りのふかい端正な顔面が蒼白く、長身は瘦せこけていた。三十四、五歳に見えるが、實際は、まだ若いのかも知れない。

その思索生活は、貧しきをとまなっているらしく、生きていることに疲労した色が、表情を暗いものにしていた。

背負った少女は、美しい顔だちをしていた。つぶらな瞳が大きく、唇のかたちがよかった。しかし、いたいたしいくらい、頸^{くび}も手足も細かった。

男は、駅員に、

「邑久郡津留見^{つづめみ}というところへ行きたいのですが、どう行けばよろしいでしょう？」

と、たずねた。

「津留見ですかのう。津留見は、こうつと……？」

駅員は、ちょっと首をひねった。

すると、上りの汽車に乗るべく、ホームに立っていた中年の女が、

「津留見は、ここから、軽便で、片上へ出て、そこから、連絡船で行きんさるんぞな」と、教えた。

「どうも、ご親切に——」

男は、頭を下げた。

女は、田舎ではとうてい見受けられぬ蒼白いインテリを、うさんくさげに、じろじろと眺めながら、

「わっちは、津留見の隣の虫明^{むしあき}の者じゃけど、津留見の、どこへ行きんさるぞな？」

と、たずねた。

「島森家へ行きます」

「ほう……平家館^{やまがた}へのう！」

女は、さらに、不審の面持ちになった。

平家館と称ばれる島森家は、この地方では、誰知らぬ者もなかった。

男は、女の視線が、わずらわしくなったか、

「片上行きの軽便鉄道のホームはどこです？」

と、たずねた。

駅員は、ずうっと彼方に見える小さなホームを指さした。

人影は、見当たらなかった。

男は、少女をおろして、手を引くと歩き出した。荷物は、古ぼけたトランクひとつであった。

その小さなホームで、父親は、一時間ばかり待たなければならなかった。

ホームにベンチはなかった。

男は、ひどく疲れているらしく、トランクの上に腰を下ろそうとした。

すると、少女が、なぜか、

「お父ちゃま、だめ！」

と、たしなめた。

「あ、ごめん。うっかりしていた」

男は、苦笑して、置いたトランクを、ふたたび、提げた。

やがて、乗客が十人ばかり、ホームに来了。みんな顔馴染みらしく、詠りのつよい備前言葉で、べちゃべちゃとしやべり合っている。

父親だけが、はなれた場所で、見知らぬ土地に來た旅人の佻しさをおぼえていた。

ホームに入つて來た軽便汽車は、たった一輛であつた。

汽車は、山峡をガタゴトとゆれながら、走つた。

男は、窓へ頭を凭りかけて、目蓋を閉じていた。

少女は、窓へ顔をおしつけるようにして、田舎景色を、眸子をまばたきもさせず、珍しそうに眺めている。

父親は、東京を夕刻に出た列車内で、ほとんど一睡もしていなかったし、少女の方は父親の膝をまくらにして、よく睡つたのである。

二

軽便汽車は、四十分あまりで、片上という小さな港町に到着した。

瀬戸内海の入江の奥にあるその小港は、三つばかり建っている煉瓦工場のためにあるような、湾内に大きな船など一艘も見当たらぬ、ねむつたような景色を、ひろげていた。

向かいの山波を投影させた入江の海面は、湖水のように澄んで、晩秋の陽ざしの下で、美しかった。

男は、連絡船の待合所に行つて、津留見行きの船は、いつ出るのか、とたずねた。

そこでは、若い男と年寄りが、将棋をさしていたが、旅人を振りかえりもせず、

「昨日の嵐で、船が暗礁に乗りあげてしもうてのう……修理ができるまで、当分欠航じゃ」と、こたえた。

「それでは、連絡船がないとすると、どうやって、津留見まで行けばよいでしょう？」

「歩くんじゃのう」

對手がたの返辭は、にべもなかった。

「歩くといつて、何里ぐらい？」

「四里じやのう。……山道を登り降りじやから、五里ぶんはあるか」

旅人は、うんざりして、向かいの山を見やった。

中腹をうねっている白い道が、みとめられた。

——あれを迎えるのか！

重いトランクと幼女をつれて、睡らぬ病弱のからだを、五里の山道をはこばねばならぬのか。

年寄りの方が、当惑している旅人を見やって、

「そうじや。チカが、今日、津留見へ、稲刈りにもどると言うと思ったから、ひとつ、連れにたのんでみてあげようかう」

と、言つて、腰を上げた。

父娘が、突堤で、待っていると、やがて、年寄りが、十七、八の娘をつれて来た。

日も鼻も口も、なにもかも、まんまるな、いかにもいきいきした小柄で小肥りの娘であった。

「このチカが、津留見へ案内してくれますぞな」

年寄りが、引きあわせた。

チカは、男へ、べこんと頭を下げておいて、すぐ、少女へ、あかるい笑顔を向け、

「まるで、人形のようにじやが……。見てるだけで、愉しゅうなるとみられえ」

と、言つた。

「黒木という者です。この娘は、小露こつゆといいます。……面倒なお願ひをしてすみません」

男は、頭を下げた。

「なんでもありませんぞな。——それじや、このお嬢ちゃんを、おんぶして行こうぞな。——ハイ、お嬢ちゃん、乗りんさい」

チカは、少女へ、背中を向けて、しゃがんでみせた。

少女は、見知らぬ他人に背負われたことが、まだないらしく、不安なまなざしを、父親に向けた。

男は、微笑して、

「おんぶしてもらいなさい」と、言つた。

少女は、安心して、チカのせなかに乗つた。

「おや、かるい！ お嬢ちゃん、メシを仰山喰べて、ふとらにや、おえんがな」

チカは、遠慮のないことを言つた。

父娘は微笑して、チカを眺めた。

東京を出発して以来の、暗くとぎされていた重い気分が、この明るい娘によって、ほぐされるような気がした。

三

津留見へ至るには、三つの山を越えなければならなかつた。

勿論、瀬戸内海に臨んだ山なので、ごくひくい、勾配も

さほどけわしくないたたずまいであったが、東京の道しか歩いたことのない男にとっては、重いトランクを提げて、登るのは、かなりの苦しさであった。

チカの方は、少女を背負っていることなど、なんの重味にも感じないように、スタスタと歩いた。

黒木と名のつた男は、坂の途中で、いくたびか、足を停めて、ひと息入れねばならなかった。

チカは、それに気づいて、

「そのトランクをかしんさい。持ってあげるぞな」と、手をさしのべた。

「いや、とんでもない。小露をおんぶしてもらっているだけで、どんなに有難いか……」

「なにを言うとりんさる。女が、子供をおんぶするのは、つとめじゃがな。……まあ、ええから、かしんさい」

チカは、むりやり、トランクを取ろうとした。

黒木は、男として、その好意にあまえるわけにはいかなかった。

「これは、他人にあずけられない理由があるのです。私が、持って行きますよ」

「そうかな。そんなに大切な品ものが、入っとりんさるんかな？」

「この小露の母親の遺骨が入っているのです」

「えっ！」

チカは、目蓋を、せわしく、まばたかせた。

「このお嬢ちゃんのお母さんは、亡くなりんさったんかな？」

「そうです。小露の母親は、津留見の生まれです」

「え?！」

チカは、大きく目をみひらいた。

「津留見の、どこの家のひとじゃろ？」

「島森家の娘です」

黒木の言葉をきくと、チカは、おそろしい衝撃を受けた表情になった。

「そ、それじゃあ、この、お嬢ちゃんは、美都様の……」

そこまで言いかけて、チカは、みるみる、涙をいっばい、双眸にあふらせた。

「貴女は、美都をよく知っていたのですね？」

黒木は、たずねた。

「知っているどころじゃ、ないぞな」

チカは、泣きながら、こたえた。

「美都様は、わっちを、可愛がって下さって……、着物や裁縫函や、人形や——わっちが、欲しいというものを、みんな下さって——」

こたえつつ、チカは、ゆたかに発達した胸を喘がせた。

黒木は、視線をそらした。

肩をならべて歩き出してから、チカは、急に、はっと判ったという表情で、

「それじゃ、あんたさんが、美都様を、津留見から、取っ

てしもうたおひとですか？」

と、怨みをこめた視線を向けた。

「そうです」

黒木は、前方を見据えて、うなずいた。

「美都は、私のような貧乏作家の妻になったために、病氣になって、亡くなったのです」

「わつちらは、美都様が、東京で、性悪しょうあくの男にだまされて一緒にあった、というふうに、噂をきいとりました」

「性悪の男か。そう非難されても、しかたがない。私は、美都のように、顔も心も美しい女を妻にする資格のない男だった。……しかし、だましたわけじゃない。お互いに、愛しあった」

黒木は、呟いた。

チカは、ちらっと、黒木を視た。

「美都様は、お亡くなりになる時、あんたさんを、うらまれましたかな？」

「いや——」

黒木は、かぶりを振った。

「美都は、短い結婚生活であつたが、幸せであつた、と言つて、亡くなりましたよ」

「そうでしたか。……よかった！」

チカは、泪の顔を、ほころばせた。

「美都様は、あんたさんと一緒にいられたことを、ちっとも、後悔されなかつたんじゃないかな？」

「苦勞はしたが、悔いはしなかつたようです」

「それをきいて、安心しましたぞな。……実はな、美都様は、津留見の村の、いうてみれば、女神めがみのようなおかたでしたんぞな」

「女神？」

「そうですね。あんなに、お美しゅうて、お優しいお嬢様は、日本中どこをさがしたつて、見当たりますまいがな。津留見は、行つてみんさりや、ようわかりますけど、バスもかようて居らん辺鄙へんぴな村じゃ。……平家が滅びる時、島森大納言様が、十三人の家来をつれて、逃げ込まれた里ですがな。その時から、今日まで、平家館をご主人にして、村の衆が、ひっそりとな、田畑をたがやしてくらして来たのですぞな。自慢は、平家館だけじゃ。その平家館に、お妃になつてもおかしくないほどの、美しいお嬢様が、生まれなかつて、育たれたんじゃないもの、自慢の種になろうがな」

「……………」

チカの話は、黒木の胸に、強くこたえた。

たしかに——。

美都は、美しかった。八年前、黒木の前に現われた時の印象は、いまなお、昨日のことのように忘れがたい。

美都が、黒木の愛情に応えた時、黒木は、なお信じられなくらいであつた。

これほど、美しい女性が、どうして、自分のような貧し

い文学者に、心身をなげかけてくれるのか？

その感動が、黒木を泪ぐませたくらいであった。

美都が、津留見村で、いかに、大切な存在であったか、およそ想像できることだった。

「美都様が、東京へ、ピアノの稽古へ行きなさる、ときいた時、わっちらは、行かせとうのうて、足どめの鬼払い火を焚いたものですらあ」

「やっぱり、東京に、鬼は、いたんだったね」

「そうですらあ、鬼がいて——あ、いけん！ あんたさんを見たら、鬼じゃなかったことが、わかりますぞな。わかるんじやけど……」

「美都を殺したのは、私なのだ。やっぱり、鬼だ」

「そんなことを、言うちゃ、いけんぞな。……運命じゃったんぞな。美都様が、後悔なさらずに、お亡くなりになったのじゃったら、それで、ええぞな」

チカはそう言うってから、そっと、頭をまわした。

小露は、チカの背中で、ねむっていた。

「……これが、美都様のお子じゃなあ」

チカは、感慨をこめて、言った。

二つの山を越えて、やがて、三つめの山の峠へ登りつくと、そこには、道祖神が建てられ、憩い石が据えてあった。

「見んさえ。あれが、美都様のお生まれになった平家館

じゃ」

チカが、眼下を指さした。

三方を山にかこまれ、東方に、深い入江を持った村落が、黒木の足下に、晩秋の斜陽をあびて、ひっそりとひろがっていた。

白い道、小川、小さな森、点在する人家、なかば稲刈りをすませた田——どのたたずまいも、おそろく、幾十年も変わらぬ眺めなのであった。

黒木は、美都を、ここに、佇ませたかった。

ちょうど、中央にあたる地点に、二つの小さな森をしたがえるようにして、ひときわ目立つ大きな構えの屋敷があった。それが平家館であった。

母屋の大屋根に、かしづくように、幾棟かの小屋根がとりまき、高い白壁の塀が、めぐらしてあった。

人家の聚落は、この屋敷を中心にして、そのぶんを守るように、配置されていた。

一瞥しただけで、この村が、その家の支配のもとに、生活していることが、判った。

「……………」

黙然として、見下ろしていた黒木は、チカの背中で目をさました小露から、「お父ちゃま——」と呼ばれて、われにかえると、

「ほら、ごらん。あれが、お母様の生まれた家だよ」と、指さしてやった。

「大きなお家！」

小露は、叫んだ。

それは、小露にも、東京の下落合の二間きりの家と比べることができたからであった。

下町の、二階が一間、階下が二間の長屋に生まれて育った黒木は、いわゆる「お屋敷」というものに対して、抜きがたい劣等感と羨望を抱いていた。

美都は、黒木から、生家の大きなことを問われても、笑って、

「化物屋敷ですわ」

と、こたえるばかりであったが、いま足下にわだかまる屋敷を眺めて、黒木は、美都が、いかにゆたかな育ちかたをしたかを、さとした。

六畳と四畳半のぼろ家を、終の栖^{すまか}にして、ついに一言の愚痴もこぼさずに逝った美都のあわれさが、黒木の胸をしめつけた。

四

その屋敷の門前に立った時、黒木亮二は、その構えのいかめしさに威圧された。

黒塗りの正門は、大名屋敷のそれに匹敵するものだった。閉じられた門扉は、乳鉈^{ちちう}が打たれてあり、その大きさは、黒木の記憶では、京の二条城のそれにおとらなかつた。白壁の、厚く高い塀は、一町余もつづいていて、

石垣の下は、澄みきった水が、流れていた。

石の太鼓橋がその上に架^かけられていて、正門に至る。

「では、わっちは、ここで失礼しますぞな」

チカが、小露を背中からおろした。

黒木は、お礼の言葉もない旨を述べた。

「美都様のお子をおんぶできたんじゃないもの、お礼はこっちから言いますらあ」

チカは、そう言うてから、小露の前にしゃがむと、

「お嬢ちゃま、チカのことを、おぼえていてつかわさいよ」

と言うて、小指を出して、げんまんした。

それから、黒木に向かつて、

「しばらく滞在なさるんでしょうから、もう二、三べん、

このお嬢ちゃまに、会わせてつかわさい」

と、ねがった。

「滞在することが、許されれば、それはもう、こちらから、お願いしますが、……急に思いたって、通知もなしにうかがったものだから、どうなりますか——」

黒木が、こたえるや、チカは、眉字^{びじ}をひそめて、

「館のお許しがあつて、来んさったのじゃありませんのか？」

と、不安そうに瞋^ふめた。

「女神を奪った悪い男を、おいそれと、手紙の詫びぐらいで、許してもらえないものではないのでね。無断で、やって

来たのです」

「そ、そりや……」

チカは、自分があいだに立たされたような困惑の面持ちになった。黒木は、もとより、この屋敷の内に住む人々が、自分をどのようにして迎えるか、覚悟をしていたが、ただの村人でしかないチカでさえもが、困惑してみせるところを見ると、自分の来訪が、いかに無謀なものであったかを、いままさ、強く感じないではいられなかった。

美都に生き写しの小露を、祖父母に会わせれば、その怒りもとけるのではあるまいか、と考えていた黒木である。はたして、どのような待遇を受けるのか？

黒木は、全身を緊張させると、小露の手をひいて、石橋を渡った。

潜り戸は、開いていた。

門内は、広い白砂の庭であつた。

黒い置き石が、玄関まで、ならべてあつた。

そのひとつひとつを、ふみしめながら、黒木の心身は、敵城へ乗り込んだようにかたく、こわばつた。

中庭とを区切る三尺ばかりの高さの塀に沿うて、玄関に至ることになる。

その内堀から、何気なく中庭を覗^みやつた黒木は、泉水のほとりで、庭男らしい男と何か話している初老の婦人を、みとめた。

その横顔は、まぎれもなく、美都の母のものであつた。

黒木は、思わず、小露を抱きあげると、

「ごらん——あれが、小露のおばあちゃまだよ」と、言つた。

すると、むこうも、こちらに気づいて、視線を向けた。

一瞬——。

初老の婦人の顔に、はげしい驚愕の色が、走つた。

婦人にとっては、小露の幼い貌は、名状しがたい衝撃であつたに相違ない。婦人は、二十年前のわが娘の貌を、そこに見出したのであつたからである。

婦人の口から、何か叫び声が、もたらされようとした。

しかし、婦人は、叫ぶかわりに、身をひるがえして、庭の奥へ、小走りに遠ざかつてしまった。

「お父ちゃま——」

小露は、父親の顔を見かえした。

「おばあちゃまは、どうして、にげたの？」

「……それは、小露が、あんまり、お母様に、似すぎていたからだよ」

こたえながら、黒木は、胸に、何か、黒い重いものを、突き込まれたような、不快感をおぼえていた。

五

三十坪もあろう広い三和土の土間がひろがっている玄関に入つた黒木は、大声で、案内を乞うた。

右手は、腰までの高さの上がり框が、三間もつづき、そ